

一つのメルヘン 中原中也

秋の夜は、はるかの彼方に、

小石ばかりの、河原があつて、

それに陽は、さらさらと

さらさらと射してゐるのであります。

陽といつても、まるで硅石か何かのやうで、

非常な個体の粉末のやうで、

さればこそ、さらさらと

かすかな音を立ててもゐるのでした。

さて小石の上に、今しも一つの蝶がとまり、

淡い、それでゐてくつきりとした

影を落としてゐるのでした。

やがてその蝶がみえなくなると、いつのまにか、

今迄流れてもゐなかつた川床に、水は

さらさらと、さらさらと流れてゐるのであります……

【教材研究】

形式……（四連の）口語自由詩

ソネットの形式

*一四行から成る定型抒情詩。近世、イタリアに始まり、ルネサンス期にドイツ・

フランス・イギリスに広まつた。四・四・三・三、または四・四・四・四・二と行分

けし、技巧的な押韻をする。一四行詩。小曲。

・5音と7音のフレーズが多くあることで、自由詩であるが一定のリズムをもっている

メルヘン……おとぎ話・童話

神話や伝説に対して、空想によつて作った物語。（広辞苑）

（ドイツ）おとぎばなし。昔話。童話。妖精・小人・魔法使いなどが活躍する

空想的な物語。（大辞林）

硅石……主にシリカ（二酸化珪素SiO₂）からなる鉱物や岩石の総称。昔からガラス、セメント、鉄鋼、陶磁器等の材料として利用され、日本工業発展の支えとなつている。

〈構造よみ〉

1連を起、2連を承、3連を転、4連を結と考える

*転の理由

①蝶の登場

②無機の世界から有機の世界（生き物の登場）への変化

③3連にだけ「さらさらと」がない

④3連だけ音のない世界

⑤ 四行から三行への変化（形式の変化）

⑥ 一・二連は「小石」「陽」「硯石」「非常な個体の粉末」「さらさら」と乾いた無機的な、硬質な世界。蝶の登場以降は、水の流れるうるおいのある世界へ変わる。三連は、その転換の契機となるところ。

〈技法よみ〉

*「くのでありました」「くのでした」という丁寧な文体（語り方）
やさしく語りかけるような感じを与える。「メルヘン」の世界にふさわしい語り方といえる。

*「さらさら」とのリフレイン（くりかえし）

擬音語・擬態語（オノマトペ）

「さらさら」といった音を立てていると読めば擬音語であるし、「さらさら」といった感じで流れている（陽がさしている）と考えれば擬態語とも読める。ここではその両義でとることが可能。
「1連・2連」では

「小石ばかりの、河原」に陽が「さらさら」とさす。それも「硯石か何かのやうで」「非常な個体の粉末のやうで」あることから、1・2連の「さらさら」は乾いた感じを強く持っている。それに対して4連では「水は／さらさらと、さらさらと流れてゐる」とあるように、水の流れを形容する。ここには乾いた感じはなく、浅い川が軽快に流れていく感じが表現されている。

1・2連と4連では同じ「さらさら」が全く異なった働きをしていることがわかる。しかしそれにもかかわらず、同じ「さらさら」が用いられることで、4連の水の流れが唐突なものとならずに、1・2連から伏線として用意されていることがわかる。

*夜にもかかわらず、陽がさす

メルヘンの世界であれば、このような矛盾も許される。幻想性を増す効果。普通の世界ではないというイメージを強める。

*「蝶」とはなにか？

この詩の中で唯一の生命をもったものであり、蝶の登場（出現）によって水が流れる、無機的な乾いた世界から潤いのある世界へと変わっていくのである。そのような変化をもたらしたもの（造物主や神的な存在ととらえることもできる）としての蝶。

*「淡い、それでめてくつきりとした」影の意味

「淡い」と「くつきりとした」は形容の矛盾。影そのものの色が淡く、しかし、影になっているところとそうでないところの境界がはっきりしている。

*4連の「……」

① 時間的継続 いつまでも流れ続ける

② 空間的な継続 どこまでも流れていく

③ 「水が流れる世界」の永続性

〈主題よみ〉

蝶の出現による世界の転換（乾いた無機的な世界から、潤いのある有機の世界へ）の空想

【授業案】

1 転はどこか？その理由は？

2 詩の中に用いられている技法や工夫された表現を見つけて下さい。

3 その効果（そこから読めること）を考えよう。

重点 「なびきさびと」

「蝶」

「……」